

アジア教育交流研究機構

-Asia Association of Education & Exchange-



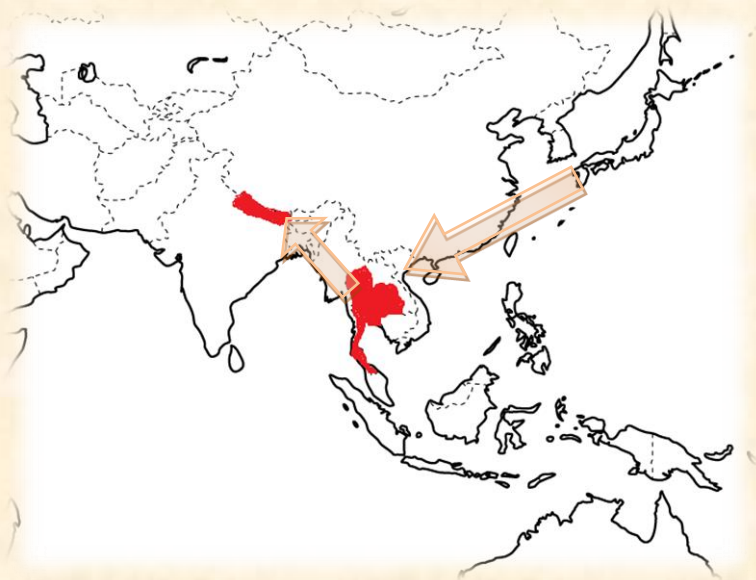
2012年タイ・ネパールスタディーツアー

報告書

◇ ツアー概要

アジア教育交流研究機構(Asia Association of Education & Exchange: 以下 AAEE)と新潟県立大学国際環境ボランティアサークル NicolvE の共同企画として、学生9名(当時国際地域学部国際地域学科2年生2名、国際地域学部国際地域学科1年生4名、人間生活学部健康栄養学科3名)が16日間のスタディーツアーでタイとネパールに滞在しました。

主な活動は右記のスケジュールの通りです。



日本からタイへ。タイからネパールへ。



ツアースケジュール

タイ滞在	3月19日
	出発日
	3月20日
	タマサート大学で共同学習セミナー
	3月21日
	アユタヤ遺跡観光など
3月22日	
バンコクからカトマンズへ移動	
3月23日	
移動日	
3月24日~28日	
3つの村でのホームステイ	
3月29日	
村からポカラへ移動	
3月30日	
青年海外協力隊の方たちのお話	
3月31日	
岸さんのお話、現地学校訪問	
4月1日	
ポカラからバクタプルへ移動	
4月2日	
Love Green Nepal 訪問	
4月3日	
帰国	

ネパール滞在

◇活動詳細

3月19日

新潟から成田へ。成田からバンコクへ。
旅の始まりです。

3月20日

タマサート大学の学生たちと共同学習セミナーを行いました。まずアイスブレイキングで歌ったりゲームをしたり。みんなの緊張もとけ始めたところでプレゼンテーションです。テーマは「女性の人権」。その後、ディスカッション。日本のことを伝えるとともにタイのことを学ぶ良い機会でした。なにより印象に残っているのは私たちが「コップンカー」とタイ語で感謝を伝えると、あちらの学生が「ありがとう」と日本語で返してくれたことです。私たちの共通言語は英語でしたが、お互いの文化を尊重しあえたようで、とても嬉しくなりました。同年代の学生たちとこのように交流できたことは、私たちにとってすばらしい体験となりました。



国際地域学科
近藤 佑紀



3月21日



アユタヤ観光や
小学生との交流

3月22日

タイ・バンコクからネパール・カトマンズに到着。
みんなドキドキワクワク。ここからが旅の本番です。



3月23日

バンでタンセンへ移動。車の中では、みんなで歌の練習のために大合唱。明日からマイダン村でホームステイです。

3月24日



マイダン村の貯水タンク



健康栄養学科
松本咲

私はネパールのマイダンと呼ばれる村を訪問した際、衛生について考えさせられました。ネパールでは都市ですら水道設備が不十分で、まして村の水不足には多くの課題がありました。毎日苦労して汲みに行く水ですが、貯水される大きなタンクの中にはコケのような物が浮いていました。村の人々がその水を平気で食事や洗濯・排泄等、日々の生活に利用する所を見て、私は大変衝撃を受けました。また、プラスチックのごみ等も、外に捨てられた状態でした。私は水道整備やごみ処理に関する施策が必要であり、保健衛生の教育を充実させることが重要であると感じています。同時に、日本人より何倍も水を大切に使用していることも実感し、日本での生活を改めなければならないと感じました。

3月25日

ネパールで1番貧しいといわれるマイダン村で、2泊3日のホームステイ！
この日、小学校で子供たちに日本語を教え、その子供たちの楽しそうな笑顔が印象的でした。他にも、バレーをしたり、ダンスを一緒に踊ったりしました。

村でのご飯は、チャパティーというジャガイモをつぶして焼いたものを朝ごはんとして食べ、昼夜は、ダルバート（ダルは豆スープ、バートは米）というカレーのようなものを毎日食べていました。

一番の経験は、豚の命をいただいたことです。豚は殺されることをわかっているように激しく鳴き、私は悲しみで涙が止まらない中、何も知らないのに命は大切だなんて言いたくなくて、切らせていただきました。しかし、村の人たちは貴重なお肉が食べられるということで、とても笑顔なのです。この経験を通して、「命をいただいている」ということを実感でき、この経験が一生忘れることのできない、大切なものとなりました。



健康栄養学科
鶴田 恵



チャパティ



ダルバート

ブタから豚肉へ



3月26日、27日

OKバジとつくった橋



お世話になった
マイダンの人々とお別れ

次の村への道のり



健康栄養学科
玉上 柚衣



26日(マイダン村3日目)は、村の子どもたちとバレーボールをしました。とても白熱した試合になりました。試合後に踊った日本のダンスとネパールのダンスも盛り上がりました。それから、ネパールに住み、ネパールの支援をしている日本人男性であるOKバジと電話することができました。1988年に、OKバジはヒマラヤトレッキング中に雪崩に遭い、一緒にいた荷物を運ぶ仕事をしていて亡くなったことが機になり、ネパールに定住することになりました。村の人たちに頼まれると、なんでもOKと言っていたことから、おじさんという意味のバジがついて、OKバジと呼ばれるようになったそうです。OKバジとの電話では、私たちは一人ひとり質問できました。「幸せとはなんですか?」という質問に対して、「いろんなことをして村人と一緒に解決したとき。日本の時とは違って一緒に幸せになる喜びがある。」と答えてくださいました。どの質問にも丁寧に答えてくださり、大変貴重なお話が聞けました。

27日、マイダン村の人たちとお別れし、次の村であるチース村に向かいました。車では通れない道のりだったので、竹の棒を片手に6時間山道を歩きました。日本の山より狭くて足場が悪く、滑り落ちないかハラハラしました。移動の途中には、OKバジの作った橋がありました。これがなかったときは、子供が通学途中で川で事故にあっていたと聞きました。実際に村から村へ歩いて移動したことで橋のありがたさを知り、OKバジによって村の人が暮らしやすくなっているのだと実感しました。

3月28日

チース村からリンネラハ村へ。



チース村



リンネラハ村



3月29日

リンネラハ村からポカラへ移動。

3月30日

私たちはポカラに滞在し、現地で活躍している日本人の青年海外協力隊の方にお会いする機会がありました。そこで私たちは青年海外協力隊の方々にお話を聞くことができました。私は青年海外協力隊に興味があり、お話を聞くのを楽しみにしていました。協力隊の方々からは協力隊になるまでや活動内容などいろいろなことを教えていただきました。協力隊の方々はそれぞれ村落開発と障害者支援の活動を行っていました。村落開発では村人の話し合いに混ざり、スムーズに進むようにサポートをしたり、時には山をいくつも超える日があると聞いて体力と知力そして柔軟な考えを備えることも重要であることがわかりました。そして障害者支援を行っている方のお話では、ネパールの障害者に対する認識の違いを聞き、日本で障害者支援の問題とネパールでの支援の問題の違いに驚きました。協力隊の方々とは私たちが年齢がそれほど変わらず、私たちも何らかの形でいいから何かできるのではないかと感じました。また、協力隊になったきっかけはそれぞれありましたが、始めようという気持ち大切だというお話を聞いて、一歩踏み出すことの大切さを感じる体験をすることができました。



国際地域学科
中原千陽



3月31日

国際地域学科

石田真巳



この日、私たちは宿泊していたホテルの隣にあるシャムロックという学校を訪ねました。このシャムロックという学校は、勉強したくても家庭が貧しく、学校に通うことが難しい子供たちでも通えるよう、海外のNPO団体の支援によって設立された学校です。生徒のほとんどが英語で日常会話ができるほどのスキルを持っています。私たちは寮を案内してもらったり、お互いの国の遊びを教え合ったりなどして交流をしました。この時のコミュニケーションはもちろん英語です。この時私は、国が違い、母語が違って英語という一つの言語を共有することでお互いの意思を伝えあうことができることの素晴らしさを改めて実感しました。何も言葉が通じない状態での身振り手振りのコミュニケーションの良さというのも村でのホームステイを通し感じましたが、コミュニケーションツールとしての英語の重要性も再確認できました。



ネパールの学校に個人でボランティアに来ている日本人男性岸さん（ニックネーム、エース）のお話を聞いて、ネパールの教育格差について考えさせられました。特に、私立の学校に対して公立の学校は質の良い先生が十分にいない、使われている教科書が英語ではなくネパール語、などの問題があるため国が行っている SLC（School Leading Certificate）に生徒が合格できないということを知りました。このような現状があるため、子どもを持つ親は、少しでもお金があれば我が子を私立の学校に通わせたいと思うそうです。しかし、家計が苦しい家では公立学校に通わせる選択しかできないため、教育格差を是正するのは容易ではないと感じました。

おとなしめで優しい笑顔が印象的な岸さんは、ポカラの学校の子どもたちに、「エース！エース！」と呼ばれていてとても信頼されているようでした。学校では数学を教えているそうです。岸さん自身は学生時代数学が嫌いだったそうですが、ネパールで先生をするようになり、数学の必要性を感じ、今では予習する時間が楽しいとおっしゃっていました。笑顔で自分の活動についてお話ししてくださる岸さんを見て、個人ボランティアは大変なことも多いけど、現地の人とゼロから自分で信頼関係を



国際地域学科

野島萌子

4月1日

ポカラからバクタプルへ。

4月2日①



バイオガスの装置

国際地域学科
今野美咲



私たちはアミーラ・ダリさんにお会いしました。ダリさんは、女子教育や環境保全などの問題を解決するために、「Love Green Nepal(LGN)」という NGO を 1991 年に設立したネパール人女性です。ダリさんは私たちを LGN の事務所へ連れて行ってくださり、そこでお話を聞いたり、施設を見学させていただいたりしました。教育を受けることが出来ない女の子のために 10 年ほど前から奨学金制度を開始し、約 300 人の子どもたちが学校を卒業し、社会人として活躍しているそうです。また、バイオガス発生装置も見せていただきました。牛の糞を利用してガスを発生させるため、森林伐採を防ぎ、薪拾いに費やす時間を失くすことが出来るという、環境にも人にも優しいエネルギーです。

ネパール人自ら強い意志を持ち、ネパールの女性のために熱心に支援活動を行っている様子を知ることが出来た貴重な経験です。

4月2日②



国際地域学科
松栄容佳

バクタプルで物乞いの子供たちの多さに衝撃を受けました。写真撮って！とカメラに寄って来た子供たちにモデル料金を請求されたことは今でも忘れられません。素敵なサリーをまとっている写真の女性は Lami Khatakho さんです。彼女はたまたま出会った観光客の外国人に支援されて大学へ通っていますが、幼い頃は彼女も物乞いをする1人でした。多くの観光客や子供が存在する中で彼女らが出会えたことは運命だと感じます。自らの力では確かに難しいけれど、物乞いをする中で常に自分の未来を変えるチャンスを待っていたのです。Lami さんは一生懸命勉強をしながら、自分と同じような過去を過ごす子供たちのためにオープンスクールを作り、そこへ私たちを招待してくれました。ダンスやスピーチなどのおもてなしに、歌やドジョウ掬いの踊りを披露してお返ししました。私たちは彼女たちの姿から、どんなに小さなことでも夢を叶えるきっかけは自分の力で掴むことが出来ると学びました。特に日本にいる私たちはチャンスに溢れる中で生活しています。ぜひ皆さんには、目の前にあるに気付く努力を忘れないでほしいです。同時に、私たちと同じ若い女性や子供たちが今日もネパールで地道に頑張っているということを忘れないでほしいと思います。

4月3日

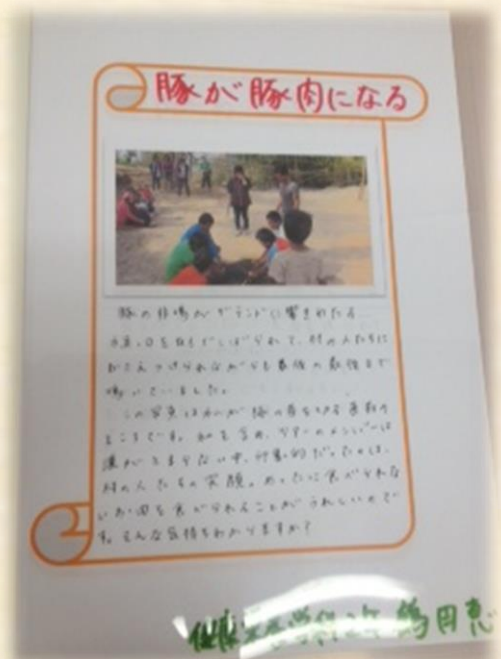
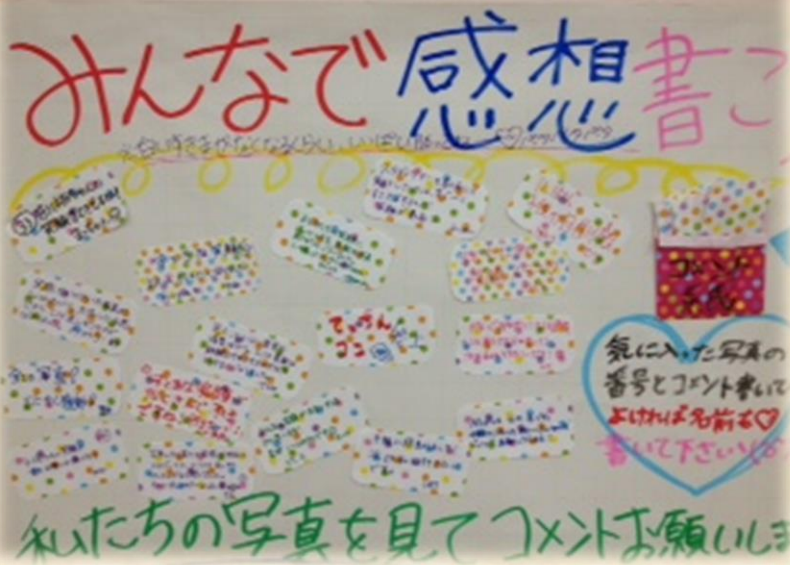
旅の最終目的地はパシュパティナート。

ネパール最大のヒンドゥー教寺院へ行き、火葬場を訪れました。

私たちは最後に「死」そして「生きるということ」について考え、
帰国の路につきました。

◇帰国後の活動

6月には大学内での報告会を行い、10月の学園祭では写真展を行いました。



◆参加者の声

私が昨年スタディツアーに参加した理由はとても単純なもので、入学当初から“学生のうちに自分の目で様々な世界を見ておきたい”という思いがあったからです。しかし、あえて旅行ではなく、サークルのスタディツアーを選んだのは、企画の提案者が一つ年上の先輩だったからです。「自分が経験したスタディツアーの面白さを皆にも味わってほしくて企画することを決めた」と話す先輩がとてもかっよく、この人と行けるならどこでも良い！と思ったほどでした。

実際、ネパールを訪れ、村でのホームステイや教育現場をのぞくなどの経験を通して、想像と現実とのギャップに驚き、自分の無知さを恥じました。しかしそれらの経験は決して後ろ向きな気持ちにさせるものではなく、もっと知りたい！もっと学びたい！という欲を掻き立てる前向きなものでした。とくに印象に残っているのは現地の学生との交流です。その時間自体は長くはありませんでしたが、他国の同世代の人と意見を交わすことの面白さに初めて気づき、同時に、より深い議論をするためには英語の力を伸ばさなければいけないということを肌で感じることができました。

帰国後の私はすっかりネパールの虜になり、なんと気づけば今年もスタディツアーへ参加していました。今回も人々の温かさに触れ、新しい世界を見ることができました。それもこれも去年のツアーがあったからです。最初から最後まで頼もしいリーダーでいてくださった佑紀さん、参加者の皆、そして一年後の2013年のスタディツアーもお世話をしてくださった関先生とそこご家族、アシンさんに深く感謝しています。

私たちは健康栄養学科ということもあり、興味のある世界の食文化を肌で感じたかったので、参加しました。また、このツアーで他ではできないことを体験し、視野を広げてこれからの自分に生かしたいと思いました。

まず、村では一日二食とおやつ二食という食文化の違いや、特別な時にだけ豚等の肉を自らさばいて食べることに驚きました。実際に豚の首を切らせていただき、食べ物に感謝すること、日本の残食の多さなど様々な問題について考えさせられました。そこで帰国後、先進国の食肉の加工過程の写真や動画を調べると、そこには動物の命を何とも思わずに、痛めつけて殺していく人もいるという現状があり、衝撃を受けました。また、動物性タンパク質や野菜が不足している現状を知り、村の人たちは栄養不良ではないかと思いました。帰国後、大学の講義で学び、その人達がクワシオコール（小児のタンパク質欠乏を主因とする栄養失調）ではないかと思い、ツアー前に知っていたら違う視点で考えられたはずだと思いました。

日本との環境の違いにおいては、日本が衛生的に優れ、便利であることを実感しました。しかし、それが村の人たちにとっては当たり前で、私たちは便利な暮らしを知っているからこそ不便だと感じてしまうのだと思いました。また、ネパールの暮らしを体験し、水などの資源は大切だと身を持って知りました。しかし日本では、衛生的な面を重視するために水などを使うことが必要不可欠であることを実感し、この両方の思いにもどかしさを感じながら生活しています。今回の経験でたくさんしたこと学び、考え、自分の視野を広げることができました。

最後に、今回のツアーを企画してくださった近藤佑紀さん、携わってくださった皆様、本当にありがとうございました。

2011年大学2年生の春、「スタディーツアー行きましょう！」サークル紹介でのこの一言から、企画がスタートしました。そして一年後の2012年春、素晴らしい体験を終え、「スタディーツアーに行ってきました」と笑顔で報告できたことをとても嬉しく思います。

なんといっても印象に残っているのは、村の子どもたちの逞しさです。ネパールの村でのホームステイ初日、ステイ先の娘に手招きをされ、導かれるままに彼女のあとをついていきました。彼女がもつ大きな水甕から、水汲みに向かうのだとわかりました。しかし歩けど歩けど、目的地にはつきません。岩だらけの山道で前からヤギの群れが歩いてくれば、足場も狭くなります。日本では歩いたことのないような道に、私は足元に気をとられながらついて行くだけで精一杯でした。ふと視線をあげると、きれいな山々が連なっていました。そうしてやっと、私はヒマラヤの国ネパールにきたのだと実感したのです。その瞬間、涙が頬をつたいました。なぜでしょうか。ネパールの美しい景色に、心を動かされたからでしょうか。企画が実現し、みんなをここまで連れてくることができた実感して、安心したからでしょうか。水汲みのために幼い彼女たちが危険な道のりを歩いていく後ろを、ただついていくことしかできない自分の不甲斐なさからでしょうか。世界では多くの子どもたちが日々の生活のために水汲みをしていることや、時にその道のりが危険なことは、ツアーに行く前から知っていることでした。私たちは日本で暮らしていても、本やテレビ、インターネットなど様々な媒体により、活字や写真でそのような事実を知ることができます。しかし一切フィルターを通さずに自らの目で現実を見つめたとき、それ以前とは全く違う感情で胸がいっぱいになりました。また、こうして子どもたちの逞しさを目の当たりにする度に、私自身の弱さを思い知らされるようでした。

さて、日本に帰国し大学内でツアーの報告会を行った時のことです。ある学生からこんな質問をされました。「国際協力といったとき、私たちにはなにができると思いますか？」現在、日本のみならず、多くの国々が開発途上国に支援を行い、国際協力やボランティアを行う民間団体は数えきれないほどあります。そのような中で、国際協力に関心を持ち始めた若者であれば誰でも「どのような行いをすべきなのか。自分にできることはないのか。一体なにが“正しい”ことなのか」と考え、悩むものだと思います。また、私もその一人です。そして今回のツアーを通して、そのような問いを再び考えたとき、私が出した答えは「共感できる団体や人々のサポートをすること」でした。これは誰でも今すぐに始められることではないでしょうか。もちろんこれから学び続けることによって、この答えは変わっていくものだと思いますが、私が今回このような答えに至ったのは、様々な形でネパールの問題に取り組む人びとのお話を直接伺う機会をいただくことができたからです。JICAの青年海外協力隊といったネパールにとっては“他国政府”からの協力、岸さんのような“個人”でのボランティアという形、日本とネパールを繋ぎ、村の人々と村の問題解決のために活動されているOKバジこと垣見さんのお話、シャムロックスクールといった“他国NGO”の活動、Love Green Nepalのようにネパールの人々がネパールのために運営する“自国のNGO”やリラさんのように自国の子どもたちのために活動する人。すべての出会いが私に考えるきっかけを与えてくれました。そして現在、私はアジア教育交流研究機構(Asia Association of Education and Exchange: AAEE)のコーディネーターとして活動しています。それはツアーを通じAAEEの活動理念に深く共感したことが大きな理由です。

多くの人びとに、たくさんの出来事に感謝するツアーでした。まず、ツアーを一緒につくりあげたメンバーみんなにありがとう。お水をくんできてくれてありがとう。ブタさん、命をありがとう。素敵な景色をありがとう。この旅を支えてくれた友人、家族にありがとう。そしてなによりAAEE 関昭典会長とご家族をはじめ、タイのAAEE 秘書：ラタ・トンクラジャイさん、ネパールのAAEE コーディネーター：アシン・ドゥワさん、その他AAEE 関係者の皆様の惜しみないサポートに感謝いたします。最後となりますが、ツアー参加者を代表して、お礼申し上げます。最高の旅と最高の経験をありがとうございました。

2012年AAEEスタディーツアー学生統括リーダー
現AAEEコーディネーター 近藤佑紀



Thank you Thailand and Nepal

